

Midnight Press

2011.10.28



「midnight poetry lounge」レポート 6

2011年4月30日、midnight poetry lounge vol.6の講師をお願いした瀬尾育生氏が提示した主題は「純粹言語論」であった。新宿で、中村剛彦とともに瀬尾さんとその打ち合わせをしたのは3月6日。その5日後、3月11日午後2時46分、僕は都営地下鉄三田線の新板橋

駅で、いまだかつて経験したことがない地震に遭遇した。その時のことはいまも昨日のこのように記憶されている。

ところで、3月11日の後、瀬尾さんと再打ち合わせをする必要を僕は覚えなかった。瀬尾さんは、3・11以前に考えた「純粹言語論」という主題で、3・11以後を語る人可以だと思ったからだ。果たして、瀬尾さんから4月30日を前にして寄せられたことばは次のようなものであった。

「重苦しい日々が続く中、短い時間ですが、上のテーマに限らず、皆さんとお話しできればと思います。お暇のある方、お立ち寄りください」

当日、僕は白紙の状態に瀬尾さんの話を聴くべく、会場の東京堂書店会議室に向かった。会場に着くと、瀬尾さん、そして中村剛彦が会場のレイアウトを円卓形式に変えようとしているところだった。瀬尾さんのその気持ちを了解することができた僕は、すぐにその作業をともにした。

以下は、当日の記録に瀬尾さんに手を入れていただいたものです。この記録を読んでいると、4月30日が昨日のこのように思い出されます。いま考えるべきことが提示されている、この思考のドキュメントをお読みいただければ幸いです。

(岡田幸文)

1

今日は4月30日なのですが、震災から1カ月半ほどが経って、公の場所で人々が人々に向かって話しはじめる時期になりました。そのとき発言す

るのか、しないのか、また発言するとしたらどう発言するのか、という問題があります。例えば「現代詩手帖」が震災の特集をするからというので僕も声をかけてもらったんですが、結局書けませんでした。一方



(瀬尾育生氏)

では、ツイッターでもメーリングリストでもない、たんに「全員返信」でやりとりするだけの10人ぐらいのグループが、僕のばあい自然に3つぐらいできてしまって、それでいろんな人たちと応答していると、いつのまにか1カ月半ほどの時間が過ぎてしまった。ひとつの事柄について、こんなにたくさんリアルタイムで発言したことはなかったというくらいたくさんのかを書きました。それはもちろん私信ですから公開ではありません。公開で発言するというのはまた別の問題なんですね。

公開的に発言するときに、どういう順番でどういう人が発言するのがいいか、自分なりに考えたことがあります。一言でいえば、その人の発言が「人々に求められている」人から順に発言するのがいいのだ、ということです。逆に言うと、その人の発言が自己言及にならない人から順に発言するのがいい。つまり、語ることが自分に戻ってくるような人は、なるべく発言をやめといたほうがいいということです。メディアの幅は限られていますから、人に言葉を届けるとき、ほんとうに相手に言葉が届かなければ困るという人がまず発言すべきであって、これは「誰々が」考えていることだ、というふうに固有名に回帰する人は、なるべく後に回ってもらったほうがいい、という原則を考えました。そうすると、おおよそ詩人というのはいちばん最後、ということになるのです(笑)。和合亮一さんなんかの場合は被災者ですから、真っ先に発言していいと思いますけど、「ここで詩の力を発揮するんだ」とか、「これが言葉の力なんだ」とか、「いまこそ詩人たちの力で」とか、詩人自身に自己回

帰するような語り方をしたい人たちは、したければしてもいいけど、なるべく後のほうでやってもらいたい、と考えました。

今日のテーマは「純粋言語論」といいます。このイベントの内容について打ち合わせをしたのは3月6日でした。ところが11日でほとんど世界が変わってしまったから、いったいこのままでいいのかと思いますけど、あれこれ考えたうえで、やはりこのままで行こうと思いました。それで予定どおり「純粋言語論」ということでお話します。こういう場面で知識的にふるまうというか、大学の授業みたいに資料を持ってきたりするのはよくないな、とは思いましたが、前から準備していたとおりのプリントをお配りしています。

2

プリントの最初のところに、ベンヤミンの「言語一般および人間の言語について」、「翻訳者の使命」などのテキストからの引用があります。今日テーマにした「純粋言語」という言葉は、決して私が恣意的につくった言葉ではなく、由緒正しい根拠を持った言葉であることを示しておこうと思ったわけです。最初の「言語一般および人間の言語について」。題名が最初から不思議なことを語っている。つまり、「言語一般」というものがある、というんですね。「人間の言語」だけが言語ではない。そうではなくて、「言語一般」というものがあるんだ、ということがこの題名に含まれている。すべての人間の精神生活はそれぞれの言語を持

っています。音楽の言語、彫刻の言語、司法の言語、技術の言語……というようなものがあるわけです。それだけではありません。ランプも言語を話している。山々も、狐も、話している……とベンヤミンは言っているわけですね。ランプも山々も狐もみんな私たちに向って語っている。人間が言葉を使うのは、まず最初に、それらのものの語りかけに答えるためなのです。事物が語っていて、生物が語っていて、無生物が語っていることが先で、それに応答してはじめて、人間が語る、ということが始まる。

では「人間は誰に自己を伝達するのか?」。ここからはベンヤミンのヘブライ的な思考があらわになるところですが、もともと神は言葉によって事物を創造したのだから、そのときの創造の語が事物の中に残され、そこから語り出しているはずだ。その語り出しに答えて人間は事物や生物や無生物に名づけているのだから、この応答を通して人間は自分の本質を神に伝達していることになるのだ、と。こうして神—事物—人間—神という円環ができあがる。これが「純粋言語」の流れだ、とベンヤミンは言っているわけです。《人間は名づけるものであり、この点にわれわれは、人間のうちから純粋言語が語り出していることを認識する》。

3

いくつか「全員返信」でやりとりしているグループの中に、むかし国立でやっていた詩人たちのグループがありました。最初に、ポルトガル

にいる横木徳久さんから「皆さんご無事ですか」というメッセージが来ました。そこから応答が始まって、添田馨さんはお母さんが仙台市若林区にいらっしゃって、山に近い方だったから直接に津波で被災されたわけではないけれども、一時期孤立されていたことがあった。震災直後の添田さんの言葉で印象深かったのは、「ここでどうやって心を強く保ったらいいのだろうか」という言葉でした。僕自身、震災の直後の何日間か過ごしながら、どうやって心を強く保ったらいいのか、と毎日思っていました。どういう情報を得て、どう判断したらいいのかという以前に、ともかくどうやって心を強く保ったらいいのか、ということをもまず第一に考えていた。

それからしばらくして、倉田比羽子さんから「花が咲きました。鳥が飛んできました」という言葉が来ました。何か苦しいこと、不安なことが切迫するとき、それは僕たちが「人間の言語」の中がちがちに閉じ込められている状態なんです、そのときふと「花が咲く、鳥が飛んでくる」という、まったく別の言語がそこに入り込んできたという気がして、それをとても印象深く覚えています。起こっている出来事について「人間の言語」で話していくかぎりでは出口がない。どんどん事態から離れてゆく、ということが起こります。数万人の死者がいる。何十万人の被災者がいる。それは大きな数字ですが、事柄が数値になり、情報になってゆくという意味では、事態はどんどん抽象化され扁平になり、遠くなってゆくわけです。だが私たちが感じていること、ほんとうに直面

していることは、そういう「人間の言語」の外側からやってくる。何か自分の存在を直接に語りかけてくる。とりわけ原発の事故は進行形なわけですから、原発から何キロのところに、いま人間だけじゃなくて、ウシがいて、ネコがいて、イヌがいて、ということはだれもがリアルに感じるべきことです。倉田さんが「花が咲きました。鳥が飛んできました」と書いてきたとき、そういう存在たちの言葉につながるものが聞こえてきた。

4

「純粹言語」が言及されているもうひとつの例として、ベンヤミンの「翻訳者の使命」を挙げてあります。近代の言語学は一般に、人間が言語を持っている、言語は人間に帰属するものだと考えてきました。20世紀にはいつ「言語論的転回」以降の現代言語論になると、人間ではなくて言語そのものが事物を切り分けているんだ、と考えるようになってきました。でもそれはどちらでも同じことです。いずれの場合でも、存在は、人間の判断や識別能力、あるいは言語そのものの分節能力と相関的に考えられているわけです。例えばある言語では、イヌとヤマイヌとオオカミとが分節されている。ところが別の言語ではイヌとオオカミにしか分節されない。するとヤマイヌはイヌとオオカミとの分節の中に解消されて消滅する。ヤマイヌの存在は、人間の識別能力や言語の分節によって決められる、というわけです。しかしベンヤミンの考え方はまったくち

がいます。人間が命名しているわけではない。あるいは言語が存在を分節しているわけではない。そうではなくて、まず第一に、事物そのものが語り出しているのだ。それへの応答として、人間がそれらに名前を与えるのだ。それが人間の命名ということの本質だ、というのです。

この順序を証明するのが「翻訳」ということです。個々の言語が事物を切り分けていると考えたら、ある言語システムのなかの語を他の言語システムのなかの語と交換することはできません。なぜ翻訳が可能になるのかの根拠を言うことができないわけです。なぜ翻訳が可能なのか。まず第一に、ひとつの事物あるいはひとつの事態が語り出しており、それへの人間の応答が、それぞれの言語のなかから行なわれているのだからです。諸々の言語のなかから、語がひとつの同一のものを志向しており、個々の言語があるひとつの事態に向かってさしむけられている。そしてそれらは個々の事物が語りだしている言語の実体のなかへ合流してゆきます。《諸言語間のあらゆる歴史を超えた親縁性の実質は、それぞれ全体をなしている個々の言語において、そのつど一つの、しかも同一のものが志向されているという点にある。それにもかかわらずこの同一のものとは、個別的な諸言語には達せられるものではなく、諸言語が互いに補完しあうもろもろの志向 (Intention) の総体によってのみ到達しうるものであり、それがすなわち<純粹言語 (die reine Sprache)>なのである》。

5

例えば、パンのことを、ドイツ語ではBrotといい、フランス語ではpainといい、英語ではbreadという。それぞれの語はそれぞれの言語の体系の中で固有の価値をもっています。だから、ほんとうをいえば、Brotとpainとbreadとは意味が違うってことになるんでしょうが、それにもかかわらずそれらは「翻訳可能」である。なぜ翻訳可能かという、まず第一に、パンという事物が語り出しているからなんですね。パンがまず私たちに話しかけており、私たちは個々の言語体系の中からそれに応答している。命名というのは、事物の語りかけの、「人間の言語」への翻訳である。だから、諸言語のなかのそれらの命名が、語義としてズレをもっているにもかかわらず、互いに翻訳可能になるのです。まずはじめに事物の方から話しているから、その語り出しを取り囲むようにして翻訳が可能になっている。ベンヤミンのように翻訳という概念を拡大すれば、言語にとって本質的なのは表現ではなくて、むしろ翻訳のほうである。なぜならわれわれにとっていちばん重要なのは、事物が語りだしている言葉を聞き取って、それに応答するということだからです。

震災が起こって、重苦しい時間を何日か過ごした後で、ふと夜の散歩に出かけると、ジンチョウゲがとつぜん匂ってくる。人通りもなく、クルマも走ってなくて、空気が澄んでいるものですから、いっそう強く匂ってくるんですね。しばらく歩くとユキヤナギが、夜の中でとつぜん白い固まりのようになって咲いている。レンギョウが咲きモクレンが咲

きコブシが咲いている。そういうとき明らかにそれらのものが、「人間の言語」の向こう側から私たちに呼びかけているということがわかります。私たちがそれらの名を思い出すのは、そのあとからなのです。植物とか動物の場合ははっきりしているのですけれども、機械の場合でもそういうことは起こります。たまたまこの間、長い間乗ってきたクルマを新しいクルマに買い換えるということがありました。前のクルマ、17年乗ったんですね。それを3月19日にディーラーに持って行った。そのとき、ほんとうにクルマが叫んでいる、泣いているという気がしました。クルマはほんとうに毎日つきあってきた友達ですから、ごめんね、ごめんね、ありがとう、ありがとうと声を出して、クルマの肩をたたいたり撫で回したりしながら、ディーラーまで持っていきました。

6

ここには挙げていないんですが、ベンヤミンがもうひとつ言っているのは、固有名詞の問題です。事物と人間の関係のなかでは、事物がまず話している。人間がそれに応じて事物に名前を与える。では名前を与える者同士が名づけ合うときはどうするのか。命名者同士が呼び合うときは互いを固有名で呼ぶんですね。それが固有名というものが持っている特別な意味です。普通の存在者、たとえばパンなどの場合は食べればなくなる、季節が過ぎると花は散る。古くなったクルマは運ばれてゆく。けれども固有名の持ち主たちは「死ぬ」んですね。ネコだってそうなん

ですけど、ノラネコでまだ名前がないうちは、ああ、あのネコがいなくなった、いつのまにかどこ行っちゃったんだろうと、そのまま忘れてしまうかもしれません。だけど、あるネコにジローちゃんという名前をつけたとすると、ジローちゃんがいなくなったときには、死んだんじゃないかと思うわけです。固有名をつけたとたん、その存在には「死ぬ」可能性が生まれる。逆に言えば、あるものが「なくなった」というのでなく「死んだ」あるいは「お別れした」と思えるときには、潜在的にであれ、そのものが固有名的に存在していた、ということの意味しています。

ハイデガーもまた、言語の構造について似たようなことを言っています。プリントのうしろの方に「言語（1950）」からの引用があります。その最後の部分。《しかし人間の語りは、死すべきものたちの語りとして、それ自身のなかで完結することはない。死すべきものたちの語りは、「言語の語り」との関係のなかにあるのだ》。

「言語とは何か」を本質直観しようとするれば、言語を外から見てあれこれ分析したり規定したりするのではなく、言語が現に生起しているところ、話されているところに赴いて、そこで言語がどうなっているかを言えばいいわけです。「言語はどうなっているのか」。そこで何が起きているのか。するとそこでは「語るということ」が起きている。「語るということが起きている」「言語とは語っているということだ」「言語が語っている」という言い方が正しいのです。「人間が」話している、

と言えば、これは現象学の立場からいけば方法的な越権であって、「人間」は形而上学的な主体になってしまいます。でも人間はもともと主体ではありません。ここで《死すべきもの》と書かれているのは、固有名を持つもの、人間のことで、人間の話ですが、「人間の語り」つまり死すべきものたちの語りは、決してそれ自体で完結することはない。それ以前に「語るということが起こっている」のです。人間の語りはそのほんの一部分であって、事物・無生物・生物……それら存在者たちすべての語りだとの関係のなかにしかない。その一部分、特別に固有名を持つものとして人間は「死すべきもの」になっているわけですが、言語というものを考えようとするかぎり、「人間の語り」に先立ってさまざまなモードで「語り続けているもの」の先行性・超越性をみとめないわけにはいかない。そういう前提を、ハイデガーはベンヤミンと共有していると思います。「純粹言語」という語で何をいいたいのか、こういう言い方で、なんとなくつかんでいただけたのではないかと思います。

7

今回のような大きな規模の震災だと、たぶん地球規模の、ある種の磁場の変容といいますか、われわれの精神的な部分を含めて支配している磁場全体を動かすような、大きな変容が起こったと考えるべきだろうと思います。それは地震発生のときに突然起こったわけではなくて、たぶんそれより前から少しずつ起こっていたにちがいない。前震や予兆があ

って、その後大きな地震がきて、それから余震がずっと続いている。全体として地球規模の大きな磁場の変容のようなことが起こったんだと思います。われわれ一人ひとりの心理的な構造も言葉も思考も、その影響を受けざるをえない。じじつ影響を受けていたと思います。自分のことを考えてみても、僕がそれをはっきりと感じたのは2月20日ぐらいからでしょうか、自分のなかの、あるごくささいな心の迷いですが、それがあまりに深く自分のなかに内向するのにびっくりした。ほとんど主体が分裂するんじゃないかというくらいに「割れていく」感覚がありました。それから2月末から3月はじめにかけて、いくども、自分で自分の始末に困るような、不可解な出来事があった。そして3月11日が来たのです。そのあと3月の末になってもまだ、普段だったらそうならないだろうし、僕自身もそうは受け止めないはずの心理的な混乱がありました。ここにはなにか、あの物理的災害と人間個体との間の、決して物理的なだけではない感応性があったと思うのです。

あれくらいの規模の災害になると、決して外的な自然災害であるだけではありません。それは「存在災害」と呼ぶべきものであって、私たちと関係のないところで自然が振動した、というようなことではないのですね。存在の全体がそこで口を開き、語り出している。事物や生物や無生物が一挙に語り出して「人間の言語」はこのことをうまく分節できない。それはまさに「純粹言語の問題」だった、と言いたいわけです。普段は人間が自然の状態をコントロールしていると思っているから、「純

粹言語」は「人間の言語」に翻訳され取り込まれている。ところがそれが制御できなくなって、「純粹言語」が直接語り出すということが起こった。それが地震であり、津波であった。たぶんそれに前後して、みなさんの内面とか、みなさんの主体の割れ目のようなところで、同じような災害が起こっていたにちがいないと思うのです。人々は地震・津波は自然災害であって、それは不可抗的にありうるものだ。だが原発事故は予期され警告されてもいたのだから人災であり、責任を負うべき人々がいる、と言います。「人間の言語」のなかではそのとおりで、このことはつねに区別しなければならない。だがここでもし「存在災害」という言葉を使うならば、原発事故はそのなかに含まれ、その全体の構造が考えられなければならないことになります。

8

ところでそういう災厄や存在災害としてではなくて、「純粹言語」が直接人間の口を動かして、言語現象として出現するという特別なできごとがあります。そこに新約聖書からの引用があげてあります。新約聖書「使徒行伝」第一章。《五旬祭の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起こってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった……》。イエスが亡くなって最初のペンテコステ（五旬祭）の日がきた。使徒12人とその弟子筋の人たち120人くらいが集まっているところに、突然風が吹いてきて《舌

のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に充たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語りだした》。ここでイエスは、「人の子」というステータスから「聖霊」というステータスに変わって、人々の上而降ったと理解されるわけです。それが集まっている使徒たちに、自分の言葉ではない「他国の言葉」を語らせた。ドイツ語でいうと in anderen Zungen、つまり「別の舌で」語り出させたということです。しかもそれを取り囲んでいた人々は《見よ、いま話しているこの人たちは、皆ガリラヤ人ではないか。それなのにわたしたちがそれぞれ、生まれ故郷の国語を彼らから聞かされるとは、いったい、どうしたことか》と言う。彼らが「別の舌で」話しだしたときに、まわりで聞いている人たちは、それぞれ「自分の国の言葉」だと思ってそれを聞いた。

もうひとつは「コリント人への第一の手紙」十二章。パウロの手紙のなかに「異言」という言葉が使われています。《異言を語る者は、人に向かって語るのではなく、神に向かって語るのである。それはだれにもわからない。彼はただ、霊によって奥義を語っているだけである……》。

「異言」というのは Glossologia、この Glosa というのは「舌」のことで、すから、英語でいうと speech with tongue、「舌で語る」ことを意味しています。頭で考えるのではなくて、舌の先がふるえて自動的に言葉が出る。

シュルレアリスムには「自動記述」という概念があって、その場合は手が自動的に筆記するのですが、同じことがここでは音声言語について起こる。頭はからっぽになっているんだけど、舌の先が自動的に震えるわけです。パウロはそれができたんですね。以後アウグスティヌスにしても、ルターやヤーコブ・ベーメにしても、そういう人たちは多かれ少なかれグロソラリアができました。ただしそれは公開されたり書き留められたりすることがない。公開され書き留められるときには「人間の言葉」に翻訳される。「異言」は人間の言葉に翻訳されると「預言 Prophetie」と呼ばれます。異言は異言のまま書き留められたり、人々に告知されることはないけれども、「預言」のかたちに置き換えて、つまり翻訳して人々に告げられる。旧約聖書には多くの預言者たちが登場しますが、彼らは神から受けた靈感を、預言に翻訳することができた人たちです。

9

旧新約聖書の最初に「創世記Genesis」があります。神が「光あれ」といったら、光があった。命名することと、そのものの存在が同じだという世界を表わしています。昼や夜についても、海や山についても、植物・動物についても同じで、神の命名がそのまま、そのものの存在になります。事物が語りだし、生物や無生物が語りだす、というとき、その語りだしの源泉にあるのは、神の創造の語です。ただ人間だけは造られ

方が違う。人間だけは、まず泥で神の似姿が造られ、そこに神が息吹きを吹き込むのです。これは人間に、神と同じ名づけの能力が吹き込まれたということの意味をしています。神は名によって事物を造った。事物たちはそれぞれ自らの名を内包していて、それを語り出している。人は事物や動植物のこの語り出しに応答して、それらに名づける。名づけることによって、人は自分の本質である命名能力を神に伝えている。神と事物・動植物と人間をつらぬいて一つの流れができる。この円環する流れのことをベンヤミンは媒質（メーディウム）と呼びます。現在さまざまなメディアがわれわれを取り囲んでいますが、人間がメディアをツールとして使うわけではない。メディアというのは人間を、他の存在者たちとともに、そのなかに巻き込んで流れているもののことを言うのです。

もうひとつ、メディアの流れの中で「像」というものが持つ独特の意味があります。純粹言語が人間の言語に翻訳できない場合、存在の語り出しが人間の言語に翻訳不可能であるような場合、それが言語を媒介せずに、直接「像」となって、イメージとなってあふれだすということが起こります。それを「黙示Apokalypse」と言います。旧約時代の後期から多くの黙示文学がつけられ、そのうち「ヨハネの黙示録」が新約書のなかに残されています。ヨハネはパトモス島にいる。そこに神の声が聞こえてきて、呼び出されるままにヨハネは中空に上げられる。空全体がスクリーンみたいになっていて、終末的ヴィジョンがそこに次々と映し出される。「像」として直接プロジェクトされる。「TIME」という雑誌

が東日本大震災を特集したときに、それに「アポカリプス」という題をつけました。何十年か前にはヴェトナム戦争がそう呼ばれていたわけですが、自然が、存在が、人間にコントロールされることなくそのまま語りだしている、ということ指してそう呼んでいるわけです。「像」は言語よりも実在に近いので、人間の言葉に到底おさまらないような出来事も「像」としてなら出現することができます。そういう出現のことを黙示録的apokalyptischと呼んでいるのです。

10

ペンテコステの話にもどると、わけのわからない、異様な言葉が語られたとき、周囲にいる人々には、どの人にとってもそれが「自分の国の言葉」であるかのように聞こえた、ということが重要です。この話はちょうど旧約聖書の「バベル」を反転した形になっているのですね。「バベル」とは何か。もともと世界が純粋言語だけでできていたときには、言葉はすなわち事物であり、語は実在物を離れることはありませんから、言語はひとつです。だが人間が「善悪の木」を知ってしまうと、そこには「判断」ということが生じ、人間が事物を「抽象」ということが起こり、人間は、実在を離れた観念の構築物をつくるようになります。言語は事物の実在から離れて、人間たちの規範によって支えられた観念のシステムになるのです。「人間の言語」は言語規範を共有する個々の民族とか種族とかに帰属しますから、民族や種族の数だけ別々の言語が

存在し、言語は分裂して互に通じ合わなくなる。これが「バベル」ということです。

ところでペンテコステでは、それと逆のことが起きている。純粋言語が直接に人間の口からあふれだして、それは「人間の言語」としてはわけのわからないものなのに、それを聴くだれにとっても「自分の国の言語」として了解される。「異言」という形での純粋言語の流出は、その間に介在した善悪や判断や抽象や規範や観念の構築をとりはらって、どの種族・民族にとっても同じものであるような実在を出現させる。それが「バベル」の反作用であり、それへの応答になっているわけです。「使徒行伝」のこの箇所は、とても重要なものですが、ヨーロッパ・キリスト教の「人間」中心主義、「人間の言語」中心主義にはなじまない。ヘレニズムからヨーロッパ・アメリカを通して日本にきた西回りのキリスト教では、たぶんあまり触れられない部分だと思います。

異語が語られるとき、周囲にいる人々には、どの人にとってもそれが「自分の国の言葉」であるかのように聞こえる。それはまた次のことを意味します。純粋言語のそのままの突出が起こるとき、それは多くのばあい自然災害だったり、それにとまなう人間の構築物の損傷だったりするのですが、それは「人間の言語」に翻訳されるかぎりでは、まず第一に「自国語の出来事」として受け取られる、ということです。自然災害はまず第一に「国民的」災害になります。そのことを通路としてはじめて、それが存在的な普遍的な問題につながるのです。

プリントに法華經の陀羅尼をコピーしておきました。「法華經第七卷陀羅尼第二十六」の一部です。

《わたくしたちは、世尊よ、この『正しい教えの白蓮』を、身につけているにせよ、書物にしているにせよ、これを護持する良家の子女たちを保護し防衛し庇護するために、呪文の句を送りましょう。それは次の通りであります。

あぬえ まぬえ まね ままね

ちって ちゃりて さめ さみた

うゝ いしゃーんて むくて むくたため さめ あうゝ いしゃめ

さまめ じゃえ くしゃえ あくしゃえ あくしね しゃーんて

さみて だーらに あーろーか＝ばーしえ

ぶらていあうゝ ぇーくしゃに にでいる あびあんたら＝にうゝ いしゅて

あううゝ いあんたら＝ばーりしゅっでい

むくとれ むくとれ あらで ぱらで す＝かーんくし……》

今日はこうしてテーブルを円くして座っていただいているので、いちどみなさんと声を合わせて読んでみたいと思います。

(全員で読む)

もう一度やってみたいと思います。こんどは「自分の耳に聞こえる大きさで」という読み方です。人には聞こえなくていい。ただ自分の耳だけに聞こえる声の大きさというのがあると思います。それでもう一度読んでみたいと思います。

(全員で読む)

一八世紀東欧のユダヤ人たちの間で、ハシディズムというユダヤ教の革新運動が起きます。同時代のキリスト教のクエーカーやメソジストと同じように、いわば純粋言語の直接的な注入を受けることを目指す運動です。ハシディズムの集会で祈祷文を唱和するときの読み方がこんなふうでした。他人に聞こえない、自分の耳にだけ聞こえるような声で読むのです。グロッソラリア＝舌の言葉について話しましたが、舌は耳殻の付け根からはじまって口腔の全体にひろがっています。言葉をその空間の中でだけ響かせるということです。ところが全員がそんなふうにいるうちに、個々には聞こえないはずなんだけど、なんとなく聞こえてきてしまう全体の声があるわけです。そんなふうにごわめきが響き始めると、ところどころでラビが大きな声を出して唱和にアクセントをつける。「ここでそろえなさい」というわけです。全体として、誰が読んでいるのかわからない声が響くようになります。

いま読んだのは法華経の陀羅尼なのに、どうしてハシディズムの祈禱の話になるのか、飛躍していると思われるかもしれません。それを説明するために、そこにユーラシアの地図を書いておきました。大乘仏教はどういう流れで展開してきたのか、いっぽうユダヤ・キリスト教はどういう流れをとってきたのか、とくに中東から小アジア、東欧という空間がそのときどういう意味を持っていたのか、というのを図示したものです。

シャカの直接の信徒集団の教えは南方へ向って小乗仏教の流れをつくります。それに対して大乘仏教が形成されるときには、その流れはいったん北西へ向かい、ペルシャ、アフガン、ガンダーラのあたりで、法華経、華嚴経、維摩経といった大乘經典の主要なものが作られます。それが紀元一世紀くらいのことです。いっぽうキリスト教はパレスチナからパウロの伝道によって西に向かい、ローマ帝国に入ってヘレニズムと合流してヨーロッパ・キリスト教が作られます。のちにローマ帝国の分裂にともなってカトリック教会と正教会が分裂しますが、いま問題にしているのはそれよりもっと前の段階の話です。

初期キリスト教がユダヤ教主流と戦いながらローマに入ってゆこうとする最初の段階で、そこからはじきだされたアッシリア東方教会の流れがありました。ヨーロッパ・キリスト教はギリシャ哲学と合流して知的・哲学的な神学を形成しますが、初期キリスト教のうちヘブライの霊

性的な部分はこのアッシリア東方教会に受け継がれてゆきます。これがのちにイスラムが形成される契機となった。それだけではありません。ここからはカトリック教会から異端とされるネストリウス派キリスト教が形成され、ペルシャ、バビロン、アッシリアあたりに分布して、ゾロアスター教やマニ教や初期大乘仏教などと干渉しあいながら、やがて六世紀頃になってシルクロードを通して中国に入ります。中国では「景教」と呼ばれ、かなり古い時代に日本に入ってきた形跡があります。この流れに着目すれば、ユダヤ・キリスト教と大乘仏教は、われわれから見るとそう遠くない、ある場所を共有していることがわかります。

そこに宮澤賢治の『銀河鉄道の夜』からの引用がコピーしてあります。男の子と女の子と家庭教師が乗りこんできた場面です。この三人は1912年タイタニック号の沈没で死んだ三人ですから、クリスチャンである。タイタニック号では、いよいよ船が沈もうとするときに賛美歌320番（「主よ御許に近づかん」）が演奏され、それにいろんな国の人たちがそれぞれの国の言葉で唱和し、それが全体としてあるひとつの声になって響く、ということが起こりました。そのことを報道などで知って、賢治はたぶんものすごく感激したんだと思います。様々な民族があり、さまざまな国語がある。「人間の言語」のなかでは、それぞれに信じている神さまは違い、それらは激しく対立しあったりするだろう。でもひと

りの人間が「ほんとうの神さま」に向き合っているのを見たら、他の神を信じている人たちであっても、同じようにこころをゆすぶられ「涙がこぼれる」だろう。それが『銀河鉄道の夜』第二稿、第三稿に登場する《セロのやうな声の男》のセリフ——《みんながめいめいじぶんの神さまがほんたうの神さまだといふだらう、けれどもお互ほかの神さまを信ずる人たちのしたことでも涙がこぼれるだらう》に繋がっている。

たがいの神様について「人間の言語」で語り合っている場面では、クリスチャンである三人、男の子、女の子、家庭教師が考えている神様とジョバンニの考えている神様は違います。だからサウザンクロスの駅で降りようとしている三人とジョバンニがいいあいをする。《天上へなんか行かなくなつていゝぢやないか。ぼくたちこゝで天上よりももっといゝところをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ》。法華経信仰の体系は、とくに近代に入ってからは一神教的な骨格を強めていて「僕の先生」は、賢治が慕っていた日蓮宗国柱会の田中智学を思わせませす。《こゝで天上よりももっといゝところを》というのは智学の主張した「寂光浄土」を意味するよう見えます。だが《あなたの神さまってどんな神さまですか》と青年が言うのに対して《ぼくほんとうはよく知りませす、けれどもそんなんでなしにほんたうのたった一人の神さまです》とジョバンニは答える。《ほんたうの神さまはもちろんたったひとりです》《あゝ、そんなんでなしにたったひとりのほんたうのほんたう

の神さまです》という応酬にこめられた賢治のモチーフは、さきの《セロのやうな声の男》のセリフが述べているものと同じです。

一神教はたがいに非和解的に対立しあうから危険だという人がいます。だが一神教は一神教であるがゆえに相互に排他的であるのではない。一神教は本質的にあらゆる宗教性の完成形態なのだから、たがいに「同一」でありうる。賢治の直観はそういう形をしています。これは賢治に一神教を教えた浄土真宗の島地大等などの考え方でもありました。

14

一神教の「同一」という賢治の直観は、日本近代のなかで、浄土教や日蓮宗やキリスト教が、それぞれ別々に教義や神学のアイデンティティを形作ってゆくときの力学とは、まったく違うものです。それはむしろ、もともと2000年近く前に、地理的にいえば、ペルシャとか、バビロンとか、アッシリアとか、カルディア、アフガニスタンといった共有されたトポスにおいて、ユダヤ・キリスト教と大乘仏教が混淆しあいながら一神教的構造を形作ってゆくときの出来事を反復している。《たったひとりのほんたうのほんたうの神様》の根源は、2000年前のその空間に、すでにあったと考えられるのです。

宮沢賢治自身がグロッソラリアに近いものを書いています。いまの宮沢賢治全集には「歌曲」と分類されたものがいくつか楽譜つきで載っている。そのなかに入っています。そこに「応援歌」という歌があります。

歌詞は次のようなものですが、ローマ字書きになっていて、楽譜にあてはめられています。それをかな書きにするとこうなります。

《ばるこくばららげ ぶらんどぶらんどぶらんど
らあめていんぐりかるらっかんの さんのさんのさんの
らあめていんぐりらめっさんの かのかのかのかの
だるだるぴいとろ だるだるぴいろ
ただしいねがいはまことのちから
すすめすすめ すすめやぶれかてよ 》

さっきと同じように、声を合わせて、みんなで読みたいと思います。

(全員で読む)

こんどは自分の耳だけに聞こえるぐらいの声で読みます。

(全員で読む)

賢治は、この詩に「A tropical war song modified」つまり「南方の戦争の歌」という副題をつけています。だがこの音韻詩の発想は、もともと法華経の陀羅尼から来ているのではないかと思います。

20世紀のモダニズムの系統の詩人たちは、東西を問わずこういう試みをしばしばやりました。未来派のアナロジズム詩のパフォーマンスとか、ダダイズムのシュヴィッターズの音声詩とかがそうです。イエイツの『幻想録』は、奥さんが神懸かりになって「向こうの世界」の使者た

ちの言葉を口述するのを、イエイツが筆記していったものです。社会の歴史段階で言えば、アイルランドと大陸ヨーロッパでは一世紀くらいの時差があつて、イエイツはアイルランド・ナショナリズムの勃興期の詩人、シュルレアリスムはフロイトを理論的に参照している20世紀現代の文学方法、というようなことになるでしょうが、それらの自動発語・自動記述は、全体としてひとつの並行現象になっていると思います。しかもそれらは20世紀固有の現象というよりも、2000年前にユーラシアで起こったことの反復であると考えerほうが正確なんだろうと思います。

15

先に触れたハシディズムの祈りの唱和もそうです。ハシディズムというのは、ユダヤ教主流の中におこった異言派といった性格を持っていて、ふつうのユダヤ人共同体の人々がジナゴグで集まって祈りの言葉を同じテンポで唱和している。するとある時期から、そのなかにどうしてもテンポが合わない人たちが出てくる。突然奇声を発したり、突然テンポが遅くなったり速くなったり途絶えたりする人が出てくる。それは「デベカート」といって、神との合一感が突然高まった状態で、神との対話を直接声に出してしまうために起こる現象なのですが、そのために全体のテンポがどうしても合わない。他の人々と発語のリズムが合わなくなってしまう、ということが起こる。そういう人たちは、もうジナゴグに来なくてよろしい、ということになって、仕方がないから自分たち

で別の共同体をつくります。それがハシディズムの運動の発端になった。最初の中心人物がバアル・シェム・トブ。三代目くらいにラビ・ナフマンという人がいて、この人がマルティン・ブーバーの先行者ということになります。ブーバーは、ハシディズム信仰を西洋近代に理解可能な形で伝達した人、ということになります。

地理的に言うと、ハシディズム運動の起こりはポーランドの南。オーストリア＝ハンガリー帝国当時にガリシアと呼ばれた地域です。それはウクライナとオーストリア＝ハンガリー帝国との境目あたりです。第一次大戦後、ハシディズムの人たちのかなりの部分はパレスチナに移住して、そこで自分たちの共同体をつくります。いっぽう移住しなかった人たちもかなりいて、ウクライナあたりに残っていた。やがて第二次大戦期にナチスがやって来て、その人たちを残らず収容所に移送してしまった。ハシディズム共同体はそこで根絶され、その空間は更地になってしまいました。この空白地帯に、戦後ソ連によって作られたのがチェルノブイリの原発です。ハシディズム運動の形で、純粹言語が噴出していたまさにその場所に、その存在のポテンシャルを引き継ぐかのようにして原発が建てられる。存在のポテンシャル、エネルギー——透谷的にいうと《フォースとしての自然》——が噴出していた場所が、ここで原発の立地に転用されていることになります。

ドイツ語の震災報道を見たり聞いたりしていると、AKW（アー・カー・ヴェー）という語がしばしば出てきます。これはアトム・クラフト・ヴェルクAtomkraftwerkの略です。これに対してたとえば水力発電所はヴァッサー・クラフト・ヴェルクWasserkraftwerk、WKW（ヴェー・カー・ヴェー）と言います。ヴェルクWerkというのはwork、作動させること、ある潜在的な力を顕在化させることです。人間のもっているイメージを作動させるとか、事物がもっている潜在力を作動させるとかいうことですから、「作品」という意味にもなります。英語でワーク・オブ・アートwork of art芸術作品というのを、ドイツ語ではクンスト・ヴェルクKunstwerkと言います。文学作品も造形作品も含めて、芸術作品はクンスト・ヴェルクである。クラフト・ヴェルクとクンスト・ヴェルク。同じように、ある潜在的なポテンシャルを外に出してやることをさしています。

ハイデガーが技術論のなかでとりあげている「ポイエーシス」というギリシャ語がそれにあたります。例えば、ヘルダーリンがライン川の詩を書いて、その詩作品の中にライン川の存在をあらわに引き出してくる。これは芸術作品、クンスト・ヴェルクです。だがもうひとつのやり方があります。山を切り開いて、川を堰き止め、水位の差をつくって、水を落とし、ライン川の存在のポテンシャルをエネルギーとして引き出す。これがクラフト・ヴェルク、水力発電所です。隠れている存在のポテンシャルをあらわに引き出してくることで、これら二つは同じです。

だがこの二つのポイエーシスには本質的に違うところがある。ヘルダーリンの詩では、ライン川はライン川であるままで、その存在が作品の中に輝きだしてくる、というふうになっています。それに対してクラフト・ヴェルクは、ライン川に変形を加え、傷をつけ、せき止め、吊り上げ、仕立て上げ、立ち上がらせるという形をとっています。しかもそれは「役立つ」ために引き立てられているのです。「役立つこと」に向かって引き立てる、というこの構造をハイデガーは「ゲシュテルGestell」（立たせ・組み立てること）と呼びます。

この構造を社会全体に広げると「徴発」「徴用」「動員」ということがあらわれます。モビリジールンmobilisierenというのは「動員する」ということです。戦争は人間を兵士として「動員」する。西欧近代国家では19世紀末普仏戦争のころには「一般動員 allgemeine Mobilisierung」という態勢がとられます。身分・職業にかかわらず成人男性国民はひとしく戦争に「徴発」されるということです。だが20世紀に入って第一次大戦になると、これが「総動員 totale Mobilisierung」に変わります。すべての成人男性を動員するだけでなく、政治・経済活動のすべて、エネルギーのすべて、資源のすべて、そして文化活動のすべて、つまり老若男女すべての人間能力が動員される、ということです。

一般動員から総動員にいたる流れは連続的なものです。この「ゲシュテル」や「動員」という趨勢そのものが、どこから始まっているのかと言えば、それはヨーロッパ近代以来、デカルト以来、ということになります。つまり、中心にたてられるコギトに向ってすべての存在が「対象」として呼び立てられ、引き立てられて以来、ということです。存在が「対象物」として「人間主体」に向って立てられて以来、すべての存在が「役立つこと」にむかって整列させられ動員される、という趨勢が生じた。こういう構造が、ハイデガーの言葉で言えば存在の「命運」になったわけです。

命運Geschickという語が使われるのは、この趨勢は「人間」がそれを決めているのではないからです。存在が「人間主体」と「対象物」という二極に分割して立てられ、「対象物」が「人間主体」の役立つように引き立てられる、ということの全体が、「人間」の判断とか進歩とか誤謬とかを超えた、存在そのものの趨勢である、ということです。そのような趨勢のなかで、ライン川もまた、クンスト・ヴェルクとしてだけではなく、クラフト・ヴェルクとして引き立てられている。それは「人間主体」が自らの態度を反省したり、変更したりすることで変わるようなことではない。

同じようなことをハイデガーは、冷戦時代のはじまり頃の講演である「放下（1955）」などで、核時代に即して語っています。《今日の科学と技術の根本問題は、もはや「どこから十分な量の燃料、エネルギー源

を調達するか」ということではありません。決定的な問いは「どのようにしてわれわれは、考えられないほどの大規模な核エネルギーを抑制しコントロールして、この巨大エネルギーがとつぜん——戦争行為によらないでも——どこかあるところで暴発したり、〈暴走〉したり、すべてを滅ぼしたりすることから、人類を守ることができるか？」という形をとります》。50年以上前に語られたことですが、これは今われわれが直面している問題そのままです。いま私たちは、その技術を放棄するか、もしくはそれを完全にコントロールして、その《暴走》を完全に押さえ込むか、という問いの前に立たされている。だがこれが根本的な問題なのかといえば、そうではありません。なぜなら、この問いの形そのものが、「対象的な自然」を「人間主体」がどのようにコントロールしたらよいか、という問題の形を抜け出していないからです。そのどちらも答えにはならない、とハイデガーは言う。いっけんコントロールできたと見えるときにこそ、技術という存在の命運の、ほんとうに恐ろしい問題があらわれてくる。《核エネルギーの抑止に成功するなら——もちろんそれは成功するでしょうが——そのときこそ技術的世界のまったく新しい展開がはじまるのです》。「新しい展開」というのは肯定的な意味ではありません。それは「役立つこと」に向かって引き立てるという構造、「徴発」「徴用」という構造がいっそう透徹した形で——これはハイデガーの言葉ではありませんが、いわば「超動員」というような形で、社

会の隅々あるいは世界の隅々まで波動のように、wwwのような形でつらぬかれるということです。

18

核技術そのものを廃棄することはできません。それはもともと、人間が人間のために開発した道具ではなくて、存在の趨勢だからです。原発は廃止できても核技術を廃絶することはできません。現在の問題に置き換えるなら、原発は再生可能エネルギーに替えることができます。だけど核技術そのものはどうなるのか。現在は平和利用の名目で、先進国の国家権力がたがいにバランスをとりながら核エネルギーの利用をコントロールしようとしています。しかし原発の廃止にともなって先進国がこの主導権を放棄したらどうなるか。核技術そのものはテロリストやイレギュラーな国家が使うことができるから、アンダーグラウンドでいっそう不定形な暴走状態になる。それをどうしたら抑止できるかという問いは、いっそう困難な形で残り続けるわけです。

「ゲシュテル」という体制、「動員」という体制は、すべての存在者が「人間主体」に対して「対象物」として立てられることによって始まった。それは同時に人間自身をも対象物の一つとするような、存在全体の趨勢をつくった。人間自身が、身体として対象物になったり、内面心理として対象物になったりします。19世紀以来の実証主義的な医学や心理学はそういうところでなりたっていて、そのまま現在にいたっています。

一般動員や総動員の段階では、動員体制に対する反作用・抵抗が、人間が「対象物」になることに逆らう、という形で起こってきました。そのかぎりでは、人間が「主体」であろうとすることがそのまま、実証主義の有用性や有効性理念に対する抵抗になった。第二次大戦の終わりまで、ヒューマニズムは抵抗の原理でありえたわけです。けれども現在の「超動員」は、世界の隅々にまで波動のように押し寄せます。また人間の身体や内面の隅々にまで波動のように浸み込みます。「対象世界」のすべてがそうであるように、「人間」も、身体としても心理としても、計測可能で数値的データに置きかえうると考えられています。身体医学も精神医学も人間を数値化し、医者は患者を診ないでパソコンのディスプレイだけを見えています。核技術とネット技術は並行的であり相補的です。そのことがもたらす対象物としての均質化、データの均質化に対してヒューマニズムは無効です。またこの趨勢に対する抵抗も、ヒューマニズムとはまったく違った形で現われると思います。

19

ここで「まだら」ということについて話したいと思います。wwwなどによって社会の隅々まで均質性が浸透すればするほど、その均質性そのものが「まだら」になる、ということが起こると思います。これは「まだらぼけ」からとった言葉なんですけど（笑）、たとえばひとりの人をとってみると、その人は完全に「正常」だ、と言えるような人が、だん

だんいなくなっている。ある部分では「正常」なんだけど、ある部分では「正常」ではない。僕らはもう60歳を過ぎている。するともう、間近に自分がぼけるんじゃないか、という時期を控えているわけです。あるいはその前に、誰か身近な人間がぼけるってということもありえます。このまま高齢化が進んでいった場合、日本の人口の3割、4割がぼけている、あるいはぼけた人にまきこまれている、ということは考えられるでしょう。若い人たちにも、中年の人たちにも同じことが起こっています。そういう場合、社会の定常的な状態を想定することが難しい。国家的なプロジェクトがあっても、国際関係をどうしようとか理性的な議論があっても、3割か4割の人がぼけているならば（笑）、それを維持することができない。

「まだら」というのは、社会が理想的に均質に向かえば向かうほど、その均質が全体に波打つように不均質を抱え込む、ということです。原発事故による汚染にかかわって「まだら」の問題を言えば、たとえば半径20キロの人、半径30キロの人、半径100キロの人、半径200キロの人では意識が違う。被災地の人たちと首都圏にいるわれわれとでは意識状態が違う。福島の人と仙台の人とでもまったく違うでしょう。僕はたまに名古屋の実家に帰りますが、そこだと半径500キロぐらいでしょうか、すると名古屋の人と東京の人とのあいだでも全然意識が違うことがわかります。それは単純に原発からの距離によって決められるわけでもないし、またもっと詳細に作られた汚染地図のようなものにしたがって区分

できるわけでもない。個々の人々ごとに、さまざまな家族の事情や、子供がいるかいないか、性格や情報や思想や、そのときどきの心理状態によって「まだら」になっているわけです。この災害の全体が「国民的な」災害という理念によって均質にされてゆけばゆくほど、この「まだら」なリアリティが、それからどんどん乖離してゆく。原発事故は、それに対して、どう反応するのが「正常」なのか、という基準を想定できないような形で進行しているわけです。

20

この十年十数年のあいだにわれわれを包んでいる、ある「感じ」が、この「まだらな均質性」と深くかかわっているように思われます。国家間の戦争とか、社会的な格差とか、地域の富が不均衡であるとか、可視的な問題が一方にはあります。それらは可視的だから対処が可能です。理念として格差を導入しようとする新自由主義のようなものが敵だとしたら、それはまだ簡単なのです。だが実際には、社会は理念として均質化に向かって進み、それは押しとどめることができない。にもかかわらず一方で、十年か十五年くらい前から、社会全体に何か言いようのない「いやな感じ」が覆うようになりました。それは何か特定の名前で呼ぶことをためらわせる、なにかある「感じ」です。これまでの階級概念ではない別の格差がはじまった、などという言い方をしても、そう言っていた人が、何年かするうちに既成の左翼的な定型にもどってしまい

す。この「いやな感じ」は、その原因やなりたちを言い当てることがとても難しいのです。

国際関係からいえば、冷戦が終わって、国家間の戦争にはある程度調停可能な条件ができています。社会的な格差も、個々の人々の負っている前提条件のような部分ではほぼ均質になっている。ところが、だれもが文句の言いようがない条件が整ったところで、公然と戦争は選択され、公然と差別化が選択される。国際テロや反テロ戦争、現在社会でも家庭でも、さまざまなレベルで無根拠で理不尽な暴力が生じる。それらは「文句の言いようがない」理念や条件が整ったところで、すべての可視的な条件の「カードの上を切る」ようにして起こるのです。「なんとも言いようがない」仕方で「いやな感じ」がやってくる。抵抗もできないし逃げようもない。そういうところで、「対象世界」と同時に「人間主体」も壊れつつあるのだと思います。

人間主体も対象物も飲み込んで押し寄せてくる技術世界の趨勢を、ハイデガーはひとことで「不気味unheimlich」と言いました。ハイムとは土着・土台ということです。だからウンハイムリッヒというのは、何かに対処しようとしてもその土台・足場がない、ということです。この趨勢のなかでどうしたらいいのか。それについて「放下」におけるハイデガーの答え方は独特なものです。《技術的な装置や設備のさまざまな形態をとって、いたるところで、時々刻々、人間を操作し、突き動かし、駆り立てている諸力——このような諸力は、人間の意志や決定能力を

うのむかし超え出てしまっています。なぜなら、これらの力は、人間によって作られたものではないからです。「人間には」対処しようがありません、というのがその答えなのです。《いかなる個人も、いかなる人間集団も、主要な政治家たち、研究者たち、技術者たちからなるいかなる委員会も、経済や産業指導者たちからなるいかなる会議も、核時代の歴史的経過にブレーキをかけたり操縦したりすることはできません。それが「たんに人間的なだけの」機関であるかぎり、いかなる機関も、この時代を支配する力をもつことはできません》。核兵器の国際的な管理が計画される。温暖化への国際的な対処が協議される。個人の生活や社会単位・国家単位のエネルギー消費のあり方が問われます。それを国家間で調整して、炭素会計のようなものをつくって、対象的自然をコントロール可能なものにしてきました。だがそういうやりかたは原理的に成功しない。存在の命運である技術の問題について「たんに人間的である」ような企ては、本質的に無効なのです。

21

震災が起こってしばらく、これは神さまにお祈りするしかないよ、っていう感じをだれもが持ったでしょう（笑）。そういうこと言うと、この人、宗教の人じゃないかと（笑）思われるからだれも言わないんですけど、そういう感じをだれもが一時期持ったということは忘れないほうがいい。東電が悪いとか、政府の対応が悪いとか、原発の危険性なんか

われわれにはとっくに解っていたんだとか、あとになればいくらでも言えますけど、震災からしばらく、われわれはそれとはまったく別の心理状態に直面していた。そのことを語るには別の言葉がいるんだと思います。

「人間の言語」で言うと、これは第一に大規模な自然災害です。この自然災害にともなって、原発事故という技術災害、政治災害が起こっています。天災という部分に関しては耐え忍ぶしかないけれども、政治的災害に関しては責任者がいるので、責任者が追及され告発されなければなりません。

「日本・戦後」思想の大きな部分は、告発の文体でできています。どうしてかという、「日本・戦後」は戦争責任論から始まっているからです。戦争という災厄があった。だがこれは自然災害じゃない。全部、人間がやったことなんだ。責任者がいるんだ。鮎川さんも吉本さんも、日本戦後の問題の核心を正確に言い当てようとしたとき、最初に告発の文体を使ったし、それは必然であった。やがてこの文体を、旧左翼の人たちが党派的に篡奪し、新左翼の人たちが理不尽なところまで拡大していった。

今回の震災についても、時間がたつにつれて、悲しみや嘆きに替わって、告発の文体が全体を覆ってゆくと思います。被災者は自らの被災について、現実責任を追及し告発する権利を持っています。それによって悲しみの「存在」を埋めることはできない。にもかかわらず、告発の

文体がやがて被災した人たちの悲しみを飲み込み、埋め尽くして全体を覆ってゆくことになるでしょう。またときには被災者自身が、自らの悲しみを告発に置き換えることもあるでしょう。

でもここにはある行き止まりがある。この災害には、本質的に告発の文体によっては核心に届かないような、なにか別の「質」があるのです。

「自然災害」「技術災害」「政治災害」というふうに区別できないような、全体としての「存在災害」という本質がある。そこには私たちの「主体」も全部入ってしまっている。その部分で、日本・戦後の告発の文体が、ある決定的な限界につきあたっていると感じます。

22

ハイデガーの講演は「放下Gelassenheit」という題名です。翻訳者が禅宗の系統の人なので、そういう用語になっていますが、lassenラッセンというのは英語のletです。そうさせられたままであること。だからこの語は「身を委ねること」「自覚しつつ身を委ねること」というような意味になると思います。レット・イット・ビー、なるようにしかならない。「人間」はもう何をしてもだめだから、「存在の語りだし」に身を委ねるしかありません。ただし、そういう語をあえて言うのですから、「自覚的に」身を委ねるのです。「自覚的に」というのはこの場合何を意味するかというと、存在の命運がいま何を語りだしているのかを聴き取り、それに聴き従う、ということ。事物の言語、植物の言語、動物の

言語が何を語りだしているのかを聴き取ってそれに従え、と言っているのです。

見当はずれなことを言っているように見えますが、そうではありません。たとえば、人間と自然との関係を「環境」問題としてとらえるような考え方、あるいは生命テクノロジーを人間社会の倫理を基準にして考えようとするような考え方は、自然や事物を「人間」を取り囲むものだと考えたり、植物や動物の生命や人間自身の生命を「人間主体」中心に操作可能であると考えたりしています。しかしそういう「存在の聴き方」は根本的に間違っている、とハイデガーは言っているのです。

核技術の問題や、生命テクノロジーの問題を含めてもいいですが、そういうものは存在の命運なのだから、個人とか国家とか国際組織とか、おおよそそういう「たんに人間的な」システムはそれをコントロールできない。またそれがコントロールできたとしたら、そのときこそ技術の問題はつきつめられた、いっそう不気味な形で現われてくる。どうしたらいいか。「放下」という講演では二つの言葉でそれが暗示されています。やはり禅宗的な用語で「事物への放下」「密旨への開け」などと日本語訳されていますが、ふつうに訳せば、ひとつは「事物の方へ身を任せることGelassenheit zu den Dingen」。もうひとつは「秘密に向って心を開くことOffenheit für das Geheimnis」。

この二つの言葉が言っていることは、ベンヤミンが「純粹言語」について語っていたこととまったく同じです。「事物への放下」というのは、

「人間の言語」ではなくて「事物の語りだし」のほうに耳を傾けよ、それに聴き従えとっているのです。また「密旨への開け」というのは、事物を「人間の言語」のなかで知的に（情報として）処理するな、「人間の言語」のなかでは思考不可能な「事物の語りだし」に向って心を開け、と言っているのです。

23

「人間の言語」に翻訳不可能な「存在の表情」があるのです。存在が語りだしているんだ、それをちゃんと聴け、しばらく人間は黙ってると言わなければならない場面に、いまわれわれは立ち会っている。このことを、今回の大震災での二万人の死者が持つ意味と直接につなげて話したら、これはアタマがおかしい、という話になるわけですが、全体の「存在的なエコノミー」からいえば、無関係な話ではない。人間の社会システムが危機にさらされるときに、自然の存在たちは沈黙したまま嘆いているしかない。その嘆きは「人間の言語」に翻訳できない。だとしたら、言葉を持たない、同じ自然の沈黙に属するものとして、彼らに替わって大地や海がやってきて人間に応答するとしても不思議ではない。「人間の言語」のなかでは考えることも語ることもできないような「存在のエコノミー」があるんだと思います。

存在が語りだしている言葉、事物や植物や動物が語りだしている言葉を「純粹言語」と呼ぶならば、いまわれわれが直面しているのはまさ

に「純粹言語の語りだし」である。そういう場面にいまわれわれは立ち会っているのだ、ということをお話しました。

註：ベンヤミンからの引用は「言語一般および人間の言語」浅井健二郎訳、「翻訳者の使命」内村博信訳（『ベンヤミン・コレクション1, 2』ちくま学芸文庫）より。ハイデガーからの引用は瀬尾私訳。法華経陀羅尼からの引用は坂本幸男・岩本裕訳註『法華経（下）』より。宮沢賢治歌曲の引用は『宮沢賢治全集3』（ちくま学芸文庫）より。後二者は引用にあたって表記を変えてある。

瀬尾育生（せお いくお）1948年、名古屋に生まれる。著書に、『鮎川信夫論』（1981年）、『文字所有者たち』（1988年）、『われわれ自身である寓意』（1991年）、『瀬尾育生詩集』（1993年）、詩集『Deep purple』（1995年）、『戦争詩論 1910-1945』（2006年）、『詩的問伐 - 対話 2002-2009』（2009年・稲川方人との共著）など。



midnight poetry lounge vol. 7

入沢康夫

「詩の後ろにあるもの」